

## 一般社団法人日本医療薬学会 第73回医療薬学公開シンポジウム開催報告書

実行委員長：田中 亮裕  
(愛媛大学医学部附属病院薬剤部)

2019年(令和元年)8月31日(土) 13:00～16:45 に愛媛県薬剤師会館 3階大会議室において、第73回日本医療薬学会公開シンポジウム(主催：一般社団法人日本医療薬学会、共催：一般社団法人愛媛県病院薬剤師会、一般社団法人愛媛県薬剤師会、一般社団法人松山薬剤師会)を開催致しました。

当日、愛媛県外からの参加も多数あり、病院薬剤師および保険薬局薬剤師を中心に83名となりました。本シンポジウムでは、「情報共有ツールを活用した地域連携の実践」をテーマとし、初めにシンポジストとして5名の演者に各医療機関における連携の実践や実際についてご講演を頂き、次に、特別講演として千葉大学医学部附属病院薬剤部教授・薬剤部長の石井伊都子先生に臨床検査値を活用した連携に関してご講演頂きました。

シンポジウムでは、済生会西条病院薬局の今井崇景先生に「医薬分業未実施施設でのお薬手帳等を活用した薬薬連携」として、お薬手帳へ薬剤情報の充実を図るためアレルギーカードの作成と交付、退院情報書による退院時指導の強化、各臨床検査値を表記できない中での腎機能障害に関わる表記方法の工夫などの取り組みについてお話頂きました。次に、松山赤十字病院薬剤部の宮崎実千芸先生から「薬薬連携と診察前面談による乳癌内分泌療法の安全性マネジメント」と題して、特に、乳癌術後、進行・再発乳癌の内分泌療法や経口分子標的治療薬のアドヒアランスに着目し、アドヒアランスを良好に維持するため情報共有ツールの作成と診察前面談を組み合わせた薬薬連携の取り組みについてお話頂きました。コスモ薬局日赤店の坂川興規先生からは「内服抗がん薬の連携について～薬局の立場から～」として、松山赤十字病院より発行される情報提供書等を利用し、医師、病院薬剤師と連携してアドヒアランスの向上に努めていることや病院のみならず保険薬局間での連携についてお話頂きました。愛媛大学医学部附属病院薬剤部の越智理香先生は「外来患者における保険薬局との双方向の連携～施設間薬剤情報連絡書を利用した情報共有について～」と題し、院外処方せんへの臨床検査値の印字、「お薬伝言板」の活用、「お薬伝言板」に貼付可能な副作用モニタリングに関する各種ツール等について説明して頂きました。さらに、保険薬局のみならず病院や診療所においても情報共有は図るツールとしての「施設間薬剤情報連絡書」の活用について講演して頂きました。最後に、エビスヤ薬局志津川店の渡部覚氏先生より「吸入指導に関する愛媛大学との連携(薬局の立場から)」として、喘息やCOPD治療に使用される吸入薬に着目し、「吸入指導確認シート」を用いた理解度の確認や病院への情報提供の実施により、医師と薬剤師(保険薬局・病院)において患者の理解度や指導の要点を共有することが日常診療に重要と考えられること等の講演を頂きました。

特別講演では、千葉大学医学部附属病院薬剤部教授・薬剤部長の石井伊都子先生から「臨床検査値が繋ぐ地域包括ケア」についてご講演を頂きました。臨床検査値は、患者の状態を示す

的確な情報として、千葉大学病院では2012年から院内処方せんに、2014年から院外処方せんに臨床検査値を記載して鑑査の質の向上を図られていました。臨床検査値を用いることで、投与禁忌、過量投与および副作用重篤化の回避など薬物治療上の医療安全に大きく貢献できたとお話しして頂きました。一方、現状では院外処方せんの疑義照会が処方せん応需薬局全体で行われていないことが課題となっていることを報告され、臨床検査値は地域を繋ぐ大切なツールであり、誰もが活用できる環境を作り上げていきたいと締めくくられていました。

最後に、本シンポジウム開催にあたりシンポジウムおよび特別講演を快く引き受けて頂きました演者ならびに座長の先生方、共催を頂きました一般社団法人愛媛県病院薬剤師会、一般社団法人愛媛県薬剤師会、一般社団法人松山薬剤師会、さらに本シンポジウム開催前から運営等に始終丁寧にご対応、ご助言を頂きました一般社団法人日本医療薬学会の事務局の方々に心より感謝申し上げます。